

島の音

中里咲耶

見上げた空にキラッと光る羽影を見て、潮うしおは少し微笑んだ。サシバの渡りが始まったのだ。この偉大な猛禽類は、この島でひととき翼を休め、遠く東南アジアへと南下していく。サシバが来ると島には秋の気配が漂う。潮は乱暴に学生カバンを肩に担ぐと、アダンの葉をよけながらサシバの影を追って浜辺に降りた。傾きかけた陽射しが波頭を輝かせている。小さなヤドカリを避けながら砂に腰を下ろすと、潮は波の音に合わせるようにため息をついた。今日も部活をさぼった。音楽は嫌いじゃない、フルートの音色も好きだ。だけど潮の奏でる音と、部員の音がうまく調和しない。どんなに練習しても、自分の音だけが浮き出ているような気がする。だいたい吹奏楽部自体の人数が足りないのだ。イラついて吹奏楽部

の仲間にあたる前に、潮は部活に行かなくな
った。

「早く帰って来るなら、家の手伝いしてよ」
母の顔が脳裏に浮かぶ。
部活を休んでモヤモヤしていても、何のメ
リットにもならないのは潮にもわかっている。

打ち寄せる波までも、帰れ、帰れと言って
るようだ。

五年前に父が亡くなってから、潮の母、百
合はひとりで小さな民宿を営んでいる。わず
か四部屋しかない宿だけど、一人で切り盛り
する母の汗と笑顔が、潮と母のつつましい生
活を支えている。

帰るかあ、誰ともなしにつぶやくと潮は立
ち上がり制服の砂を払った。

もう一度、サシバの飛び去った方角を仰ぎ
見る。サシバも仲間の元へ帰る時間だ。

「あれはこの島の鳥？」

ふいに潮の斜め後ろから声がした。

ほんの少し驚いて肩越しに振り返ると、ア

ダンの横にひとりの少年が立っていた。視線が真っすぐに飛び去るサシバに向けられている。淡いサラサラの髪、白い肌、濃紺のシャツの肩に、オレンジ色が鮮やかなバックパックを背負っている。

「……えーっと、渡り鳥」

戸惑いながら答えた潮に、少年は瞳を輝かせた。

「じゃあ、あれがサシバ？」

「……そうだけど……」

少年は波打ち際まで下りると、バックパックを肩から外し砂の上に落とした。姿勢を正し、海に目を向けたまま、少年の手がゆっくりと上がり、一瞬オーケストラのタクトを振るように空を跳ねた。

「え？」

潮はその一連の美しい動作に、言葉を失って少年を見つめた。

背格好から見て自分と同じくらいかな、と

潮が思ったとき、少年はふいに手を下ろし、ほっと小さくため息をつく。と振り返り、驚いたままの潮に尋ねた。

「この辺りに、ていんがーら、って民宿あると思うんだけど、知ってる？」

「は？」

「ていんがーら」

繰り返す少年を、潮は改めて眺めた。半分外国の血が入っているような容姿。こちらを落ち着かない気持ちにさせる、色の薄いガラスのような瞳。潮は目をそらしながら頷いた。

「知ってるけど……」

だって俺ちだから、という言葉呑み込んで、続きを促すように海に背を向けて歩き出す。

「教えてくれる？」

急に人懐こい声で少年が走り寄ってきた。

「宿泊？」

「そのつもり」

「つもりって……、予約してないの？」

「してないけど、この時期なら大丈夫かなって思ってた」

確かに、今はトップシーズンではないし、宿泊客も平日の今日は一組くらいだ。でも予約もなしで島に来たというのか。一人で？

「案内してもいいけど、断られると思うよ」

「なんで？」

眉根を寄せる母の顔が目には浮かぶ。

「だって、一人でしょ？ きみ……いくつ？」

「多分、きみと同じくらい」

屈託のない口調で少年は潮に笑いかけた。

「じゃあまだ中学生でしょ。未成年じゃ無理だよ」

未成年の客を連れて帰ったら、母に怒られるのは必然だ。潮はカバンを持ち直すと、少年に背を向けた。

「名前聞いたら断らないと思う」

少年の声が追いかける。

「はあ？」

「だから大丈夫。連れてって」
訳が分からずに戸惑っている潮と並んで少年は歩き出した。
「きみ、名前は？」
そう尋ねながら潮の顔を覗き込むようにしてくる。横に並ぶと少年は潮より少しばかり背が高かった。
「：：潮」
「うしお？」
少年が片頬で笑った気がした。
「なんだよ、何が可笑しいんだ。言っとくけど、牛のうしじゃあないぞ」
幼馴染やクラスの悪友たちに、牛男とからかわれることのある潮は敏感に反応した。
「わかるよ、潮流の潮でしょ。いい名前だなあと思っ」
「あ、うん：：」
思いがけず褒められた。潮は自分の顔が熱くなるのを感じた。海からの風が急に心地いい。

「えーと……きみは？」

聞き返した潮に、

「史音」

と、まるでいらぬ物を放り投げるように、少年は小さく答えた。

「しおん？どんな字？」

「史の上の史に音」

「しじょう……？」

いろいろな漢字が潮の頭を駆け巡った。

「いいから、早く行こうよ」

史音は自分が案内するかのようには潮を促した。
た。

ていんがーらは、海から少し上がった丘にある。どの客室からも海の広がりを楽しむことのできる作りだ。一階が潮と母の住まいと食堂、二階が客室になっている。小さいけれど、庭にはハイビスカスやブーゲンビリアの木があり、泊り客を和ませている。二階の屋上から仰ぎ見る星空は圧巻だ。煌めく星々

の間を悠々と横切る天の川の大きさ。皆、言葉を失う。近くに民家がないので人工的な光に邪魔されず、思う存分夜空のシヨ―を楽しむことが出来るのだ。ていんが―らは島の言葉で天の川のこと。まさにこの宿の名前の由来だ。

それほどの坂道ではないのに史音は潮から遅れがちになり、家の前に着いたときには、前かがみになり大きく息をついた。

「弱っ…」

潮はそんな史音を横目で見て呟き、

「ここだけ」

と、顎をしゃくった。

史音は息を整えるように胸に手をやると、建物を眺め、周りを見回し、黙ったまま微笑んでいる。食堂の窓に映る母親の姿に一瞬躊躇しながら、潮は入口に向った。扉は開放的に大きく開けてあり、入ってすぐ右にある食堂から百合の鼻歌が聞こえる。

「ただいま―」

潮の気の抜けた声に、百合が顔を出した。
「おかえり。ちょうど良かった、ビールの空
き瓶、裏に出しといて」

「う、うん。いや、あのさ……」

「ついでに洗濯もの、取り込んどいて」

「だから、ちよつとその前に……」

「今日のお客さん、辛い物が好きだって言う
からね、ビール足りるかね、追加の電話も頼
むよ」

厨房に戻りながら、百合は歌うように言葉
を飛ばす。

「母ちゃん」

「早くしてよー」

「母ちゃん！」

「何だい！」

百合がお玉を手に振り向く。

「……えつとー、お客さん」

「ん？」

「だからあ、今日泊まらせてくれって、一人」

「あら、飛び込みのお客さん？」

「うん、庭にいる」

「早く言いなさいよ。ちよつと火止めといて」

百合はエプロンを急いで外すと入口に向つた。

「さつきから言おうとしたよ」

潮のふてくされた声そのまま床に落ちた。

庭に出た百合の目に、ひ弱そうな少年がしやがみこんで、飼い猫のマリをなでているのが映った。

「あれ、潮の友達？　：　：　じゃないわね」

どう見ても島のわんぱく坊主には見えない。

「こんにちは」

明るい声でそう言うと、史音は立ち上がり

深々と頭を下げた。

「はい：　：　こんにちは」

後ろからは見えないが、母の戸惑った顔が

見えるようだ。

「浜で会って、うちを探してるって」

潮の簡略な説明に百合が振り向いた。

「うち？」

潮が頷く。

「ええと、つまりここに宿泊したいと……」

「さつきからそう言ってるのに」

百合は史音に向き直ると、首を傾げた。

「失礼だけど、お幾つ？」

「十五です」

「十五ねえ……、来てくれてほんとうに嬉し

いんだけど、未成年を一人で泊めるわけには

いかないの」

「やっぱりな、と潮はため息をついた。

「一人で、どうして？ 夏休みでもないし、

学校は？」

百合の矢継ぎ早の質問にも、史音は臆せず

微笑んでいる。連れて来てしまったって余計に面

倒なことにならないかな、と潮は心配になっ

た。

「僕、國澤史音といいます」

急にはつきりとした声で史音が名乗った。

「あ、はい」

「國澤美智江の孫です」

「はあ：：えっ！　ええっ！」

百合が驚きの素っ頓狂な声を上げた途端、潮の頭に優しい笑顔が浮かんだ。

「國澤のおばあちゃん！」

叫んだ潮の顔に百合が激しく頷いた。

「まあ、まあ、ほんとに國澤さんの？」

「はい祖母がお世話になりました」

まだ少年の丁寧過ぎる挨拶を聞きながら、百合はもう涙ぐんでいる。

「そう、あなたが國澤さんの：：。おばあち

ゃん、何年も前から毎年この時期になると、

ここにいらしてくださいって」

「はい、祖母からそう聞いていました」

「もうお亡くなりになって、三年：：」

毎年、この季節に必ず来てくれたお客さん。

國澤のおばあちゃんは、潮の大好きなお客さんだった。上品な白髪、小柄な身体に似合わず逞しい足取りで、潮と坂を下って浜までよく散歩をしたものだ。

サシバの飛来を眺めて、一緒に歌を歌った

り貝殻を集めたり、まるでほんとうの孫のよ
うに潮を可愛がってくれた。優しい面影が潮
の胸に浮かぶ。
ふと、風がおばあちゃんの手のひらのよう
に潮の頬を撫でた。
「ねえ、ここで話してないで、入ってもらっ
たら」
しんみりとした空気を払うように、潮は百
合を促した。そうでもしないと、涙ぐみそう
な自分に気付いたからだ。
「そうだね、とりあえず中に入って。さあ、
どうぞ」
「おじやまします」
もう一度確かめるように二階を見上げると、
史音は百合のあとに続いた。
「わあ、いい匂いですね」
食堂に入った途端、史音はそう言いながら
厨房に走り寄っていく。
「ああ今ね、お客さんの夕食を作ってるの」
「じゃあ、僕もいただけるんですね」

無邪気そうな笑顔で百合に尋ねる史音を、
潮は不思議そうな面持ちで眺めた。
最初浜で会った時には、ずいぶん大人びた
やつだな、と思ったけど、今は子供のような
表情だ。潮の周りにはいないタイプ。
「潮、史音くんの荷物、さざ波に運んであげ
て」
食堂の椅子に腰かけて、ぼーっと二人を見
ていた潮に百合の声が飛んできた。
「え？ 泊めんの？」
思わず大声で聞き返す潮に、百合はにつこ
りと頷いた。
「史音くん、ちゃんとご両親に了解をいただ
いてるんだって。ご両親も、おばあちゃんが
よく利用していた宿ならって」
「無事に着いたって、僕あとで連絡しときま
す」
「そうね。おばあ様を偲んで、こんな遠くの
宿まで来てくれるなんて……。お孫さんがい
るとは聞いていたけど、まさか会えるなんて

ねえ」

百合はまた涙声だ。

「……さざ波だね」

潮はちよつと乱暴に立ち上がると、床に置いたままのバックパックを手にした。

「あ、僕もいくよ」

史音は、百合にぺこりと頭を下げると、潮のあとを追ってきた。

「こつち」

そう言って、二階への階段を上りかけた潮に、史音が得意そうに言った。

「ね、言ったとおりだろ」

「……なにが？」

「名前を言ったら必ず泊めてくれるって」

「……そりゃあ、國澤の……」

おばあちゃん、と言いかけて潮は言い淀んだ。本物の孫の前で、馴れ馴れしくおばあちゃんと言ひ兼ねたからだ。

「それより、ここが俺のうちだつてわかつて驚いただろ」

話題を変えようと、わざと大きな声で言いながら階段を二段跳びする潮に、

「知ってたよ」

すました声で史音が答えた。

「え？」

振り返った潮の横を、史音が一足飛びに駆け上がった。

「潮って名前聞いた時から」

言いながら廊下を進んでいく。

「えっ？ ……なんで？」

慌てて後を追いながら、潮は声を潜めた。

客室の前で大きな声を出してはいけないと、

常日頃百合に言われている。

「さざなみ、ここだね」

ドアのささやかなネームプレートを見つけ

て、史音がノブに手を掛けた。

「あ、鍵 ……」

潮が言い終わらないうちに、勢いよく史音がドアを開けた。

大きなガラス窓から、まだ沈み切らない陽

射しが降り注いでいる。

「わあ、可愛い部屋だね」

ぐるりと部屋を見渡しながら、まんざらお世辞でもない声で史音がつぶやいた。

十畳ほどの広さに、セミダブルのベッドと小さなテーブルと椅子。テレビは置いてないけど、百合の手作りのベッドカバーやカーテンが部屋をセンス良く整えている。

「ここ、もしかしておばあちゃんが泊ってた部屋？」

史音の問いに潮は小さく頷いた。

「いつもこの部屋だったよ。ここはうちでひとつだけの、お一人様専用の部屋なんだ」

「：：そっか」

部屋の真ん中に立ち尽くしたまま、史音は何かに耐えているような表情を一瞬見せた。

「後で鍵、持ってくる。それから、食事は七時だから：：」

遠慮がちに声をかけると、潮は静かにドアを閉めた。

「フルート、吹くんだって？」

唐突な史音の問いに、思わず茶碗を落っことしそうになって潮は焦った。

「な、なんで？」

「おばさんから聞いた」

屈託ない笑顔でそう言うと、史音は遅い朝食をとっている潮の前に座り込んだ。

厨房にいる百合を見ると、何食わぬ顔で鼻歌を歌っている。潮は小さくため息をついた。

「いつから吹いてるの？」

「え？ ……小五」

「へえ、早いね」

潮は黙って食器を片付け始めた。別に史音と話をしたくない訳ではない。フルートの話をすると、どうしても國澤のおばあちゃんとこのことに繋がってしまう。亡くなったおばあちゃんの話をして、史音にしているのかどうか潮には判断がつかかねた。

「今日遅いね。学校は？」

大人びた口調で史音が尋ねる。

「今日は日曜」

「ああ！　そうか、日曜なんだ」

あはは、と明るく笑う史音に潮は少しイラつとして、

「誰かさんみたいにずっと休みじゃないから」
いじわるな声を出してしまった。

史音がここへ来て、今日で三日。百合の話では、史音は少なくともあと十日は滞在するらしい。何でも外国に家族共々引っ越すため、その準備に両親が渡航している間、史音だけがこの島に来た、ということだ。

優雅だな、この年齢から外国暮らしか、と潮は改めて育ちの良さそうな横顔を盗み見た。

「そうだよね。普通は学校があるんだ」

史音がまったく気にしていないような声で潮に笑いかけた。

「潮、どうせやることないんでしょ？　史音
くんに島を案内してあげれば？」

百合が二人を交互に見ながら言った。

「え？」

「え？」

二人の声が重なった。ひとつは戸惑いの声、ひとつは楽し気な声。

「今日は他のお客さんもいないし、二人でんびりあちこち廻って来たら？」

百合はそう言うと、史音に向かって頷いている。

「いや、だって、ほら……足がないでしょ」

慌てる潮に、

「自転車あるでしょ。史音君はあたしの自転車使えばいいよ。ママチャリだけどね」

百合の明るいけれども有無を言わさない声が飛んできた。

「うわー、やった！ 僕、隣の島にも行ってみたかったんです」

はしゃぐ史音の声がそれに続く。

あの橋をチャリで渡るのかあ……と、潮は深いため息をついた。

長さ三キロ半の、海に架かる高低差のある橋を二人はなんとか渡り切った。史音は何度も自転車を下りて、休んでは海の青さや橋の高さに驚きの声を上げ、必死で潮の後を追いかけて、それでも弱音を吐かなかった。そんな史音に、潮は少しずつ気持ちが開いていくのを感じていた。島の西側にあるビーチに着くと、史音は自転車を乗り捨て広がる海に向かって走り、そのまま白い砂の上に寝転んだ。一気持ちいいなあ。こんなに身体使ってさ、しんどいけど楽しい」

少し離れた場所に腰を下ろしながら、潮は右を指さした。

「すぐそこにもうひとつ小っちゃい島があるんだ。そこがサシバの宿だ」

「サシバの？」

身体を起こした史音に頷いて、潮は言葉を続けた。

「最初会った時、サシバのことを聞いただ

ろ？ 興味あるのかなあと思つて」

「：：渡り鳥なんだよね。この時期にこの島を經由して南下していく」

「：：なんだ、よく知ってるんだ」

拍子抜けしたように今度は潮が砂に倒れこんだ。

「おばあちゃんが：：さ」

史音の声が海からの風に遮られる。

「時々：：時々しか会えなかったけど、会う

たびに島の話をしてくれるんだ。島の風の匂

い、海の色や、夜空いっぱいの星や、サシバ

の話。それがどんなに大切か、どんなに心を

豊かにしてくれるか：：」

聞いている潮の手の平を、砂が微かに流れ
ていく。

「それから、きみのこと」

「おれの？」

「うん、いろんな話」

「いろんななって、どんな？」

思わず大声を出して、潮は恥ずかしくなっ

た。

「聞きたい？」

「……」

「小学校の頃に聞かせてくれたリコーダーが、あんまり上手だったから、フルートを勉強してみないかって勧めてみたって」

「え？それって……じゃあ知ってたんじやないか。俺がフルートやってること」

「知ってた」

「知ってたくせに、なんで今朝聞いたんだよ」
「……ちよっとやきもち」

「は？」

この年齢の男子が絶対口にしないような言葉に、潮は一瞬耳を疑った。

「ほんとの孫の前で、いつも嬉しそうにきみの話をするからさあ。あの子は照れ屋さんで、真面目で、おうちのことともよくお手伝いして、明るくて……、音楽が好きで、それから」
「もういいよ……」

潮は聞いていられなくなって俯いた。

「いつ行っても優しくて」

「もういいって」

話をやめない史音に潮は背を向けた。

二人の間を、波音が時を刻むように流れていく。

「おばあちゃんに優しくしてくれて、ありがとう」

ぽつりと史音がつぶやいた。

思わずこぼれた涙を手の甲で乱暴に拭うと、

潮は涙と海水、どっちがしよっぱいんだろう、とぼんやり考えていた。

「あのさ、僕も音楽やってるんだよね」

ふいに史音が立ち上がりながら言った。

「ああ：：そう、なんだ」

急に変わるな、こいつ。潮はよろけそうになりながら服についた砂を払った。

「楽器は？ 何？」

同じ共通点を見つけたような気がして、潮は少し嬉しくなって聞いた。

「バイオリン。でも将来は指揮者かな」

潮の脳裏に、サシバの飛ぶ海に向って片手をタクトのように振り上げた史音の姿がよみがえった。

「なんか……：すげえ」

正直な気持ちが口からこぼれた。

「すごくないよ。同じだろ、フルートとバイオリン、どっちも楽器だ」

不思議そうな表情で言う史音に、潮はたじろぐ。

「おばあちゃんに聞いてなかった？」

「……うん、なにも」

史音は足元のヤドカリを手にとると、何でもないようにしゃべりだした。

「バイオリンはさ、5歳のときからやってるんだ。両親が音楽家だったから。英才教育？

……っていうやつ。毎日毎日バイオリン尽くし」

言葉を切りながらしゃべる様子が、史音の胸の内を表しているようだ。わざと抑揚を無くして感情を抑えたような。

「それで今度は親子共々ウィーンに渡って、

本格的に僕を音楽家にする計画らしい」
「：：：そっか。やっぱり、すげえな」
島でフルート吹いてる自分とは、まるで違
う音楽の世界にいる史音。さっき感じた親近
感が風に吹かれて飛んで行ったように潮には
感じられた。
「おばあちゃんは、会うたびに僕のバイオリ
ンを聴いてくれた。でも、いつからかな：：
演奏を聴きながら淋しい顔をするようになって
た」
「淋しい顔？」
「うん：」
「なんで？」
「上手な音しかしないって」
「え？：：上手ならいいんじゃないかね？」
「僕もそう思ったよ。どういうことなのか聞
いてみた」
「おばあちゃん、なんて？」
「バイオリンを弾くのをやめて、いっしょに
島へ行こうって」

「島？ この島？」
「多分、そう……」
砂の上にそつとヤドカリを下ろすと、砂を
手で払いながら、
「やつと、来れたよ。おばあちゃんはいない
けどね」
吹っ切るように最後は明るく言うと、史音
は駆け出した。
ふいに、ずっと前に國澤のおばあちゃんに
言われたことを潮は思い出した。おばあちゃん
んの前でフルートを吹いたときのことだ。
「潮ちゃん、豊かな音が出せるのね」
そうやって、優しく頭を撫でてくれた。
豊かな音……。
上手な音……。
わかるようで、わからない。
史音がかけて行く方向に、サシバの影が見
えた。一羽で悠々と飛んでいる。
サシバの風を切る羽音はどんなだろう、と
潮はゆっくりと史音の後を追いながら思っ

いた。

翌日から三日ほど続いた雨がやっと上がった。史音は自ら買って出て、潮が学校に行っている間（百合に言わせると、潮より熱心に）

民宿の仕事を手伝っていたようだ。厨房の窓から聞こえる二人の笑い声に向って、「ただいま」というときの潮は、まるで自分が他所の子供になったような気分がした。その夜、夕食を食べ終わると潮は自分の部屋に戻り、勉強机の上に置いてある黒い小さなソフトケースを抱えると、ドアから廊下を覗き、史音がいないのを確かめて急いで外に飛び出した。

今夜は満月だ。ケースを肩に背負い自転車に飛び乗ると、真っすぐに坂を下る。夜の空気が植物の濃い香りと混じり合い、潮の肺を満たしていく。視線の先の海には、月がその静かな光で一月

の道一を浮かべていた。海辺に沿った道路をしばらく南に向って走り、所々に点在するリゾートホテルの明かりも途絶えた辺り、雑木林の一角で潮は自転車を停めた。フクギの陰に自転車を隠すと、木々やアダンに覆われた林の中に分け入っていく。器用にクワズイモやアダンの鋭い葉を避けて、潮は小さな浜に降り立った。左右を珊瑚の岩で囲まれたわずかな砂地が月明かりに浮かび上がっている。家一軒分程の小さな砂浜だ。潮は波の届かない場所にそっとケースを下ろすと中から銀色に光るフルートを取り出した。三つに分かれたそれを、ゆっくりと組み立てていく。月の光を受けて、一本のフルートはなお一層輝きを増し、穏やかな波音が静寂を際立たせる。今夜も来たよ、海王。胸の内ですぶやき、そっと息を吐きだすと、

潮はフルートを唇に当てた。
星々のささやきのような、澄んだ音色が流
れ始める。
その音は、絹のように風いだ海面をすべる
ように流れていく。
深く優しく、語りかけるように、潮の吹く
フルートの音色は、夜と海の狭間を漂う。
やがて、砂浜から数メートル先の海面に、
黒い頭のようなものが浮かび上がった。月の
光がその輪郭を浮かび上がらせる。
丸い頭部と波しぶきのような模様の甲羅。
アオウミガメだ。
巨大なウミガメは、そのままじっと動かず
フルートの音色に耳を傾けているかのように
浮かんでいる。
海王！
その姿を認めて、潮も静かに演奏を続けた。
月の光が、同じ音の空間で向き合う二者を
永遠のように照らし続ける。

もと来た林を抜けて自転車のところまで戻った潮は、ぎよつとして飛びのいた。自転車
の陰に誰かがうずくまっている。
「：：史音？」
膝を抱えて俯いている影に呼びかけた。夕
食のとき見かけた史音の白いシャツだ。
「なんで、ここに？」
確かめるように近づいた潮に、顔を上げた
史音は答えようとしなない。葉陰に隠れていた
月が顔を出して史音の顔を照らしたとき、そ
の頬を涙が伝い落ちた。
「え？どうしたの？」
何がなんだかわからずに、潮は思わず史音
の肩に手を置いた。
「：：聴いたよ」
潮から視線を外して、史音がつぶやいた。
「聞いたって：：何を？」
「きみの：：、潮の音」
音？え？もしかして。
「もしかして、フルート？」

史音は頷くと、立ち上がり深く息を吐いた。
「すごいな……、すごいのは潮の方じゃない
か」
「後つけてきたの？　どこで聴いてたの？」
潮の頭の中にあるのは、海王のことだった。
海王との貴重な時間を史音に知られてしまっ
たのか？　だとしたら、あのデリケートな生
き物はもう姿を現してくれないかもしれな
い。
海王と初めて会ったのは、あの浜でフルー
トの練習をしていた時だった。家では宿泊客
の迷惑になるだろうと、自分で練習場所を探
していた時、たまたま気まぐれで分け入った
林の奥に小さな浜を見つけたのだ。そこは誰
も知らない潮だけの練習場所になった。母の
手伝いを終えて、毎晩のようにその浜に通っ
ていたある満月の夜、海王は現れた。まるで
潮の奏でる調べに誘われたように、その巨大
な身体を波間に浮かべ、潮が吹き終わるまで
その場を離れなかった。そして、次の満月の
夜も。まるで海からの贈り物のような奇跡の

時間。潮はそのウミガメに海王と名付け、誰にもこの話をしたことがなかった。それなのに史音が潮のフルートを聴いたと言う。潮の心臓は驚きと不安で早鐘のようだ。

「そこのちよつと奥で聴いた。きみの後をつけようとしたけど、暗くて道がよくわからなかった。あきらめて引き返そうとしたとき、聞こえてきたんだ、フルートの音色が……」

史音が林の奥を見つめながら言った。

「ああ……、そうなんだ」

じゃあ、史音は浜まで来ていない

安堵のため息をつきながら、潮は自転車をフクギの陰から引っ張り出した。

「どうして？」

史音が問いかけた。

「どうしてあんな音が出せるんだ？」

「……あんな音って？」

潮の問いに、史音は不思議なものでも見るように潮の顔を眺めた。

「自分で気づいてないの？ うまく言えない

けどすごいんだ、ここが揺さぶられているんな感情がわーっと出てくる」

史音は、自分の胸の辺りに拳を当てた。

「そんなこと……わかんないよ」

真剣な史音の言葉に圧倒されて、潮は自転車を押しながら逃げるように歩き出した。史音が乗ってきた自転車を起こして追いかけてくる。

「知りたいたいんだ。僕には出せてない音がどうしてきみには出せるのか」

「知らないよ……だいたいフルートとバイオリンじゃ元々音自体違うじゃないか」

「そういうことを言ってるんじゃないか！」

叫ぶような史音の声に、潮の足が止まった。

音楽に対して少し投げやりな感じだったのに、ちゃんと向き合ってるじゃないか、と潮は声に出さずにつぶやいた。

「ほんとに、わからないよ。誰かにちゃんと習ったわけじゃないし、まだまだ指使いが難しいところもあるし……」

「技術の問題じゃなくて、音なんだ」
「音ねえ……」
潮は解けない問題を出された気分になった。
「誰かに言われたことはないの？」
史音の声がおびてくる。
「うーん、ないなあ、学校でも言われたこと
ないし」
「じゃあ……なんでなんだ？　なんであんな
音が……あ！」
急に何かに気付いたように、史音が潮の前
に回り込んだ。
「おばあちゃんはおばあちゃんに聴かせ
たことは？」
「う、うん、あるよ。フルート勧められた
のも國澤のおばあちゃんだし……年に一回聴
くのを楽しみにしてくれてたし」
このフルートも実はおばあちゃんからのプ
レゼントで、とは潮には言えなかった。
「そうか……おばあちゃんなんて言って
た？　きみの演奏を聴いて」

「えっとー、豊かな音、だねって」

潮のフルートを聴くたびに、おばあちゃんはそう言って微笑んでいた。

「豊かな音：：豊かな音：：」

史音が幾度となくつぶやく。

「それから、聴いてるとこの島のいろんなものが目に浮かぶって」

おばあちゃんが言ってくれたことを、少しずつ思い出しながら潮は口にした。

「いろんなもの？」

「うん、海の色や波の音、それから、満天の

星やサシバの飛ぶ空：：」

「：：きみは？ フルートを吹いてるとき何を思ってる？」

「え？ おれ？」

自分を指さして潮はちよつと考えこんだ。

「同じ、かなあ」

「同じ？」

「うん、おばあちゃんが言ってたものと同じ。

島の色や音や匂いとか：：」

衝撃を受けたような表情をして、史音は黙り込んだ。それきり何もしゃべらずに、何か深く考え込んでいるような史音に声をかけられず、かといつてほっとくことも出来ずに、潮は長い道のりを自転車に乗らず歩いて帰った。

「どこ行ってたの？ 二人とも」

家では百合が仁王立ちで待っていた。

「気が付いたら二人ともいないし、自転車が二台ともないからどこか行ったんだとは思ってたけど、こんなに遅くまで、何してたの？

潮はしよっちゅうだけど、史音くんはお客様なんだよ。勝手に引っ張りまわしちゃだめじゃない！」

おれのせいじゃない、と心の中で反論してはみたものの、倍になって説教されそうで潮は嵐が過ぎるのを待つことにした。

「おばさん、違うんです。僕が勝手に面白がって、潮くんのあとを追いかけて行っただけ

で、見失って迷ってたところを潮くんが
見つけてくれたんです」

史音はすらすらと、しかもさっきとは打
つて変わって明るい表情で百合に答えた。

「ね？」

「う、うん」

あっけにとられながらも、潮は素早く返
事をした。半分本当で半分嘘だ。でも百
合を納得させるには史音の言い訳に乗
るしかない。

結局、史音の言葉にあっさり許されて、
潮は自室に引き上げた。

その夜、史音とのやり取りが思い出さ
れて、潮はなかなか寝付けなかった。史音
がこだわった潮の奏でる音。意識した
ことがないままに吹いていたけど、それ
はもしかしたら自分が考えるよりも大
事なことなんじゃないか、潮にとつて
も史音にとつても。いや、音楽その
ものにとつても。

考えながらウトウトと始めた潮の脳
裏に、海王の姿が浮かんだ。

翌日、学校から帰った潮に百合が慌てた様子で駆け寄ってきた。

「潮、帰って来る途中史音くん見なかった？」

「見てないけど、どうかした？」

百合は深いため息をついた。

「さっき史音くんのお母さんから電話があった、史音くん、ここに来てることご両親に言っ
てなかったみたい。ご両親が帰国したら部屋に置手紙があつて、それでここにいるってわかったらしいよ。家政婦の人には親戚の家に
行くからつて嘘ついたりみたいで」

「なんで嘘までついて……」

「きつと、おばあちゃんが好きだったこの島を見てみたかったんじゃない」

しんみりとした声で百合は空を仰いだ。

「でもね、それだけじゃないってあたしは思うのよ。あのこは何かを抱えてる、何か悩んでる気がする……」

母親の鋭い観察眼に潮は舌を巻いた。さす

が年の功！　と言ったら殴られるので遠慮した。

「それでね、明日にでも迎えに来るって」

「え！　明日？」

思わず大声が出た。

「それを伝えたら、どこかに行っちゃって」

「探す！」

百合の言葉が終わらないうちに潮は自転車に飛び乗った。

きつと、あそこだ。

潮はまっすぐにゆうべの浜へ向かった。

フクギの横にママチャリが停めてあった。

潮は安堵の息を吐き、近くに人影がないのを確かめると、林の奥に入っていた。

ポツンと、砂浜に座り込んだ史音の背中が

見える。

とうとうバレたか。

潮は苦笑しながら、そっと声を掛けた。

「史音」

ゆっくりと史音が振り向く。潮はわざとふてくされたように声を掛けた。

「なんだよ、おれの秘密の場所なのに」

「ごめん：：。最後にあの音をどんな場所で吹いてたか知りたくて：：」

「うん：：」

史音と並んで腰を下ろして、潮は遠い水平線を見つめた。

「明日迎えに来るんだって？」

「どうやらそうらしい」

史音も海を見つめたまま答えた。潮は固く目をつぶり、開けると史音の腕をつかんだ。

「史音、バイオリンを弾こう。この浜で一緒に演奏しないか？」

「え？ あ、でもバイオリンを持って来なかったんだ」

戸惑う史音に潮は言い放った。

「まかせろ、おれが用意する。それから、もしかしたら、奇跡に出会えるかもしれないぞ」

それからの潮の行動は早かった。本土から

来た音楽の教師がバイオリンをやっていたことを思いだし、すぐに教師の家へ行き頭を下げて首尾よくバイオリンを借りてきた。夕食を済ますと二人はそれぞれの楽器を手に、無言で家を後にした。百合は何かを感じたらしく、そんな二人を黙って見送った。

自転車を下りると、潮は夜空を見上げ、「よし！」

とつぶやいた。「まだ、ほとんど満月だ」

首を傾げる史音に笑いかけると、潮は浜に向った。

浜は夕べと同じように、穏やかな海面が月に照らされている。

「わあ：：、綺麗だ」

林から抜け出た史音が浜に降り立った。

「いいだろう、夜の浜。この時間がおれの貸し切りだ」

得意げに言いながら潮はフルートを組み立

てた。

「うらやましいな……」

淋しさの混じる史音の声を振り払うように

潮はテキパキと音程の調整を始めた。

「バイオリン、調弦は？」

「さつきしてきた」

「じゃあ、始めようか」

「ここで弾いたら、僕にもあんな音が出せる

のかな？」

潮は首を振った。

「おれにもわからない。けど、そんなことよ

りこの海にさ、聴かせてやってくれ、史音の

バイオリン」

「海に聴かせる？」

「うん、この島に来て史音もたくさん聞いた

と思うんだ、島の音。自然の音。おれの……

音」

月明りの下にいと、ちよつと恥ずかしい

言葉も魔法のように出てくる。

「だからさ、最後に史音もおれとこの海に聴

かせてくれよ」

少し微笑むと史音はゆっくり頷いた。

「あ、曲は？ おれ、偉そうに言ったけどそんなに知らないんだ」

頭をかく潮に史音はあっさりと言った。

「大丈夫、適当にやって。合わせるから」

この自信！ さすがだ

潮のフルートを持つ手が少し震えた。

「じゃあ始める？」

史音がバイオリンを顎と肩ではさみ姿勢を

正した。

「あ、その前に、演奏してる時何が起こっても、何を見ても演奏をやめないで」

「え？ ……わかった」

潮の真剣なまなざしに、何かを感じて史音は頷いた。

海王、来てくれ。

祈りを込めて、ゆっくりと潮のフルートが始まる。そして絶妙なタイミングで史音のバイオリンが続いた。

潮は初めて聴くその音に圧倒された。バイオリンのことはよくわからないけど、何か、とてつもないものを聴いている気がした。そして弾いている史音は絵画のように美しく、見惚れて潮は演奏を忘れそうになった。月のスポットライトを浴びながら、二人の少年の調べが海面を震わせて流れる。そして、海王が来た。ぼっかりと浮いたその姿が見えたとき、潮は演奏しながら史音に目配せした。潮の視線を追った先に、あり得ないものを見て史音の演奏が一瞬乱れた。海王はゆらゆらと波に揺れながら、いつもより少し浜よりの海上に浮いていた。その波に濡れた大きな目まで見えるようだ。史音は魅入られたように海王から目を離さず、弓を動かし続けた。音と音が曲線を描きながら、夢のような時間紡いでいく。史音は幸福そうに微笑み、潮はそんな史音を見て微笑んだ。

始まったときと同じように、ゆっくりと余韻を残しながら二人の演奏が終わった。ヒレをひるがえし、海王は大きく旋回しながら波間に去っていった。二人はしばらく茫然と、夢から覚めない子供のように立ち尽くしていた。

「今のは？」

史音が先に問いかけた。

「おれの観客。海王っていうんだ」

誇らしげに潮は胸を張った。

「すごいよ、きみの音も観客も」

「史音の音もだろ。驚いたよ、あんまりすぎすぎるからびびった」

「上手な演奏、それだけだよ」

史音が自嘲的に微笑む。

「それだけじゃない、絶対に。自然って嘘つかないって思うんだ。海王は来た。史音の音があっても」

きっぱりとした潮の声。遠くで海面を叩く

音がする。

「海王が拍手してくれたのかな」

史音の声が柔らかいトーンに変わっている。

「そうかもな」

おどけた調子で答えると潮は大きく伸びをした。心地よい疲れが身体を包む。

それぞれの楽器を丁寧に拭きながら、言葉を交わさない時間を二人は楽しんだ。

やがて、バイオリンケースを手にした史音が生真面目な顔つきで頭を下げた。

「潮、ありがとう」

史音はそう言うと、今度は海に向って頭を深々と下げた。潮は自分の胸がじんと熱くなるのを感じた。

「初めてだったよ、無心で……いや、そうじゃないな、潮の言う通り、海に聴いてもらうつもりで弾いた。そうしたら、いろんなことがどんどん浮かんできて。一緒に行った隣の島のヤドカリとか、風を切るサシバとか、猫のマリの柔らかい尻尾とか、おばさんの作る

「ご飯の匂いとか……」

「かあちゃんのこと？」

「うん、学校から帰って来る潮の自転車の音や、海に落ちる夕日のジュツという音」

「なんだ、それ！」

顔を見合わせ二人は笑い転げた。こんな風に笑い合ったのは出会って初めてだということに気付かないほど、友情にも似た感情が二人の間を流れていた。

「あと、おばあちゃんの笑った顔……」

「そうか……」

きつとおばあちゃんは聴いていてくれた。笑顔で拍手をするおばあちゃんが、潮にも見えたような気がした。

「海王……ありがとう」

史音が月に輝く海に向かって叫んだ。

遠くでまた水音が聞こえた。

翌日、朝一番の飛行機で駆け付けた母親に連れられ、史音は島を後にした。

坂を下っていくタクシーを潮は百合と並んで見送った。

「淋しくなったねえ、國澤のおばあちゃんにはもう会えないし、史音くんもこれから外国暮らしだし」

「あいつは来るよ、きつと。バイオリン抱えていつか必ず来る」

そう言い切った潮を見て、百合は微笑んで頷いた。

「さーとと、今日は御客さん三組もいらっしやるよー、休みなんだからあんたも手伝って」

百合は潮の肩をポンと叩くと厨房に向った。

「そういえばさあ、國澤のおばあちゃんて、なんで毎年一人でここへ来てたの？」

「あー、それはね、亡くなった旦那さんと新婚旅行に来た場所なんだって。だから毎年命日になるここへ来て、楽しかったことを思い出してたんでしょうね」

「そうなんだ：：」

ふふっと笑うおばあちゃんの顔が青空に浮

かんで消えた。

史音は、必ず世界的な演奏家になって、この島とあの奇跡のような出来事を美しいひとつの曲にすると潮に約束した。その曲の名前は「海王」。

おれはここで、この島で、これからも時々フルートを吹いたりしながら暮らすんだろうな、と潮は思った。風や波や、鳥や植物の奏でる音を聞きながら、自分の音を創っていく。

厨房から百合の鼻歌が流れてくる。

サシバの渡りもそろそろ終わりかな、と潮

は秋の柔らかな陽に光る海を眺めた。

終わり